

春風秋霜 7月号

平成 30 年 7 月 2 日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 シンガポール卓球選手との交流について

6月12日(火)、東京オリンピック事前合宿におけるシンガポール卓球チームと島田市の調印式が、ローズアリーナで行われました。調印式前に行われたシンガポール女子選手二人との交流試合には、市内中高生約110人が参加しました。1点先取の短い試合でしたが、リオ・オリンピックに出場した選手を相手に試合ができるという機会に、どの生徒も興奮した様子でした。

中には、緊張してサーブがなかなか決まらない生徒もいましたが、シンガポール選手からポイントを奪い、ガッツポーズをする生徒も見られました。試合後には、社会人選手とのエキシビジョンマッチも行われ、シンガポール選手の実力を間近で見学することができました。

また、参加者全員での記念写真の撮影も行われ、一部にはラケットケースにサインをもらい喜ぶ生徒の姿も見られ、生徒たちにとっては大きな思い出になったことと思います。このような出会いから、世界に向けて歩み始める生徒が生まれたらと思います。シンガポール選手団は、合宿時にも市民との交流を大切にするとのことなので、これからも楽しみです。



2 「はつくら寺子屋」開級式に参加して

6月6日(水)に初倉公民館において、「はつくら寺子屋」がスタートしました。初倉小学校の3年生25人が、多くの支援員に支えられ1年間学びます。今年の特徴は、中学生ボランティアがとても多いことです。子供たちを支える多くの皆様に感謝しています。

私は、小学校低学年において、「宿題などやるべきことはきちんとやる」「恥ずかしながら分からないと言える」などといった学習習慣をつくり上げ、中学年においてつまずきの解消や学習への苦手意識を無くしておくことが、その後の学力の定着において重要だと考えています。

今後、夏休みの補習を計画する学校も多いと思います。その時、保護者や地域人材及び中学生の活用を検討してみたいかでしょうか。補習に協力していただいた方々が核となって、既に一部地域で始まっている地域運営の寺子屋が始まれば、「地域で育つ子供」が実現すると思います。

3 6月議会から

6月議会における教育委員会に対する質問の中から、2つの質問についてお知らせします。伊藤議員からは、『今後の社会を担っていく子供たちに必需品である、ICT機器の整備・活用』について質問されました。市教委は、2020年1月にウィンドウズ7のサービスが終了するのを契機に、パソコンの更新を検討すると答えています。

私は、機器の導入以上に活用が重要だと考えます。また、変化の激しいこれからの社会を生き抜く子供たちには、柔軟な思考力や困難に負けない強い心、コミュニケーション力を育てることが求められ、そのためには夢育・地育の推進に力を入れなければならないと思っ

います。全ての教科において ICT の活用と夢育・地育の推進をお願いします。

平松議員からは、『少子化に伴う部活動のあり方』について質問されました。市教委は、少子化の進行に伴い、加入者の減少が続く部活動を維持していくことは、一層困難になっていくと答えました。

部活動を存続させるためには、経験のない生徒が加入しやすい環境を作るもののほか、合同チームの検討や外部指導者の活用などを積極的に考えることが大切です。また、学校は、個人種目における二重登録制度など、部活動を続ける様々な方法があることを、必要に応じ生徒や保護者に伝えてほしいと思います。

4 全日中報告から

全日中（全国中学校長会）の 2017 年度調査研究報告書によると、現在の中学生の特徴として、「人間関係づくりが不得意：75.7%」「言語による自己表現が苦手：70.5%」「忍耐力が不足：58.1%」が上位を占めました。中でも、「言語による自己表現が苦手」な傾向は、昨年と比べ 6.4%も増加しています。

この結果を踏まえ、これから始まる夏休みに取り組めることを、家庭に働きかけてほしいと思います。夏休みの課題の出し方によっても、取り組み内容は変わります。コミュニケーション力や忍耐力は、夏休みの様々な体験の中で育てたい力です。

肘かけ椅子

北島 正 教育委員

「たしろう えん い あ みょう他生の縁と居合いの妙」

「アッ、来る・・・！」その 1 秒後、私はそこに立って居た。何も考えなかった。滑ってくるフープ（輪）の動きがスローモーションのようだった。舞台の端から落下しかけたフープを両手で受け止めて、追いかけて来た小学生らしい女の子に渡して客席に戻った。大きな拍手の音で我に返ると、子供たちによるジュニア新体操の演技は終了していた（実はその間の記憶がないのです）。

5 月 20 日 11 時過ぎ、プラザおおりにで開催された『市民スポーツ総合開会式』のアトラクションの最中でのことである。当日、私は客席の最前列の来賓席に座っていた。最初座ろうとしていた席から、何故か少し右側に移動して座り直した。演技が始まる前、舞台の袖で出番を待っている子供たちを見た時、何故か手にしているボールが私の方に跳んでくるイメージが浮かんだ。そんな時にはすぐに拾って投げ返さねば、と一瞬思った。

演技が始まった。子供たちは、音楽に合わせて、リボン、ボール、フープなどを巧みに操って素晴らしい舞台を見せてくれていた。突然、ボールではなくフープがコントロールを外れて狙ったかのように私の方に弾んで滑って来たのだった。

その女の子はどこの誰だか判らないが、後で思い返すにつけ、不思議な縁で結ばれていたとしか思えない。今生（こんじょう）での一瞬のコミュニケーションが、言葉ではなくフープによって、まさにその『輪』の役割が果たされて成立したのだ。

いつか、この女の子が新体操で大成して、子供の頃の晴れ舞台でどこの誰だか知らないけれど、和服姿のお爺さんが暗闇から突然現れてフープを受け止めてくれたことを語る日が来るだろうか。